

連携が求められるのです。ですから、『サッカーなら、どんな障害も超えられる。』のです。

### 必要だった賛同パートナーシップ契約

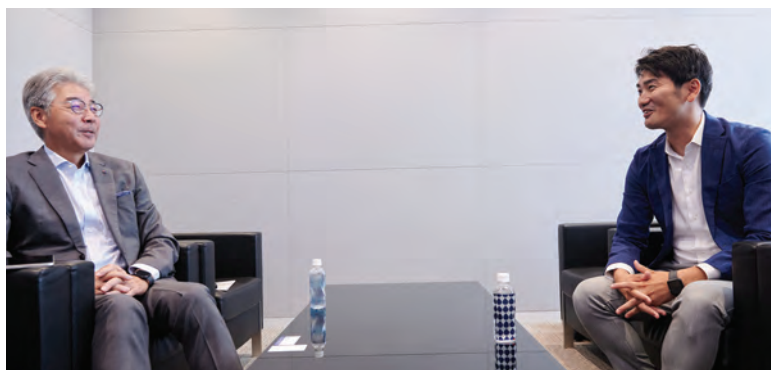
—— ユニバーサルデザイン自体にコミュニケーションの多様性があるということだと考えました。最後に、これから目指したいことを聞かせてください。

**小林** 丹青社では今年の2月から『私たちの未来ビジョン2046』を掲げています。2046とは丹青社の創業100周年を迎える年であり、そこに向けて当社のありたい姿を定めました。「空間から未来を描き、人と社会に丹青を。」をパーパスとしており、この「丹青」の文字には「いろいろ」とルビをふっています。ですから、多くの方が活躍し、いろいろあふれる共生社会の実現に向けて締結した今回のパートナーシップは特別なことではなく、必要なことを手にしたと考えているのです。

**山本** 「必要なこと」と強く言っていただけ、

心強い気持ちです。ぜひ実現したいことは、丹青社さんは全国で事業を展開されているので、各地でのいろいろな協力ができればと考えています。障がい者サッカー、スポーツを広く全国に広げるためです。今日は小林社長の熱いメッセージをお聞きし、連携を強める期待が一層ふくらみました。

—— 空間づくりと共生社会づくりは互いにシンクロしています。ぜひ、プロジェクトとして多様な丹青(いろいろ)のある展開を期待しています。



## 東京2025デフリンピックに向け手話言語アナウンサーなどの養成研修

2025年11月に東京で開催されるデフリンピックは、世界から聴覚障害の選手団など約6,000人が集まるスポーツの祭典。1924年にパリで第1回が開催されてから100周年の記念大会である。

この大会に向けて全日本ろうあ連盟はトヨタ・モビリティ基金助成事業の支援を受け、「手話言語アナウンサー・手話言語解説者・手話言語通訳者」の養成に動き出した。目的は「きこえない当事者がスポーツ放送の分野に参画することで、放送アクセシビリティやバリアフリーの仕組みの構築を目的として、『障害のある人やない人それぞれが個性を活かし、活躍できる共生社会』を体現した番組を制作すること」を掲げる。

5月から始まった研修には約50人が全国から集まった。全5回の



スポーツアナウンサーの大ベテラン山本浩氏(左)は音声実況の経験を丹念に伝えた(右は手話通訳者)

日程で行われ、8月17日～18日の最終日は、東京・蒲田にある日本工学院専門学校で、試合映像を見ながら模擬スポーツ中継を体験した。

模擬実習に先立って、元NHKのスポーツアナウンサーとして活躍した山本浩

氏が「実況アナウンサーの世界」をテーマにスポーツ音声実況のノウハウを講義。その後、9組に分かれて取り組んだ模擬中継の様子を見守った。

参加者から「山本先生に初めての模擬中継を見ていただいたの指摘は目から鱗が落ちました」という声があった。また、山本氏は「大学の講義では自分の顔を見る学生は皆無だが、受講生は全員が真剣なまなざしで顔を見ている。その様子に新鮮さと熱意を感じた」と話す。

9月に行われる全国ろうあ者体育大会 in 群馬では、卓球、バレーボール、サッカーの3競技を、県庁の動画・放送スタジオ「tsulunus」で大会初となる手話実況中継する予定。



3～4人が手話言語アナウンサー、手話言語解説者、手話言語通訳者の役割で模擬中継